

# 大分県現代俳句協会句会報 第24号

令和6年1月31日発行

【令和5年第2回雑詠句会結果&自薦作品選句号】

## 第二回雑詠句会結果発表（選句&選評）

21点 稲を刈るたびに小さくなる故郷 足立 攝

《10点句》  
ひまわりの鬱戦争が終らない 宮川三保子  
もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ 鎌倉真由美  
満月の妖しき中へ老いてゆく 園田 武子  
鯖寿司を買って上りの七号車 高倉 直人

20点 引き算の余生抱えて秋深む 甲斐加代子

《9点句》  
いつもより母がやさしい野分けの夜 足立 町子  
無花果よ庭に小さきエデンあり 藤 万葉  
太陽を閉じこめているトマトかな 安森 範明  
実さくろが空の青さへはみ出しぬ 石橋紀公子  
独り居にいつしか友となる金魚 高橋 玲子

19点 村じゅうの夕日集めて稲を刈る 足立 町子

15点 着崩れを闇にあずけて踊りけり 山口 雀昭

14点 秋天へ重いものから捨ててゆく 赤嶺 信子

《8点句》  
千の風受けて枯野はさわぎだし 御手洗豊海  
暗誦は一行だけの法師蟬 上田たかし  
主婦という服を脱ぎ置く夏の果て 鎌倉真由美  
夏厨強き女のふくらはぎ 菅 登貴子  
春愁をちよつと置き去る喫茶店 赤嶺 広史  
悔しさも生きる力や蟬の爪 高橋 玲子  
田を守り村を護りて風薫る 福井トミ子  
ひとことを言えないままに冬の薔薇 本田 圭子  
放棄地の芒は風に抗いて 井上 則子

14点 ゆく秋の三步先行く記憶力 甲斐加代子

14点 鶴折りても折りても足りぬ八月よ 有永真理子

13点 食べごろを逃れしオクラ天を突く 赤峰佐代子

13点 心配の種がぼろぼろ唐辛子 足立 町子

12点 でで虫や来世は翅をつけて飛べ 高橋 玲子

12点 ふり返るための坂道葛の花 石橋紀公子

11点 柿熟し身の混沌を抜け出せず 吉田 素子

《7点句》  
敬老日あたりまえと言う贅沢 佐藤 律子  
山じゅうが燃えて命が連鎖する 坂本 一光

売れ残るいわしの翳にある汚水  
冬近し薪を割る音透きとおる  
長電話遠くで同じ月をみて

上田たかし  
立花真由美  
赤嶺 信子

《6点句》

すかんぼを噛めばよるめいても少年  
断捨離や父の背負いし草刈機  
人生の余白を活かす後の月  
マロングラッセ一粒分の秋の恋  
新米の光るひと粒つまむ箸  
逝く空を毀さぬように青栗蹴る  
耳のない案山子に届く子らの声

河野 輝暉  
田代 直之  
白土 正江  
小野みち子  
井上 則子  
赤峯 友子  
衛藤 俊一

《5点句》

秋刀魚焼く男涙の美しき  
早春の音が地面で動きたる  
父の手の温もり今に七五三  
これでもかこれはどうだと揚火花  
黄砂ふる地球の吐息か空仰ぐ  
湯煙を懐にして山眠る  
被弾碑を囲い晩夏海鳴れり  
ダム底の町にも祈り暮の秋  
たましいの余韻残していちよう散る  
秋刀魚焼く天下御免の一軒家  
ぎす鳴くや湯上がりの爪あまく研ぐ  
艶やかに赤トウガラシの自己主張  
陽にまみれ土にまみれし母九月  
みの虫の袋をひとつあけてやる  
おにぎりの数だけほしい秋日和  
妻は知らずとこゝろてんとは涙いろ  
古書店の店主を覗く初燕  
ひとしきり咲いて静かな葦薺でいる

菅 攝子  
赤嶺 広史  
河野 洋子  
神 慶子  
有永真理子  
藤澤 泉溪  
牧野 桂一  
足立 攝  
御手洗豊海  
河野 洋子  
松廣 李子  
佐藤 次江  
天田 泉美  
白土 正江  
稲田久美子  
河野 輝暉  
森山 秀子  
川西 達子

虫の音を海馬におさめ夜化粧

鎌倉真由美

《4点句》

会いたくて来たよこまで曼珠沙華  
こだわりは意味のなきもの根無草  
零余子めしお代り三杯笑む母よ  
石仏がそろりと動く春の宵  
一番じやなくてもいいよ月の道  
夏帽子粋に坂道二度ころぶ  
砂糖きび齧って吐けぬ核の滓  
染みついたあんちやの匂ひ更衣  
味わい深い晩年の貌吊るし柿

安田 文  
高倉 直人  
時松ヤスコ  
本田 圭子  
岡村 君香  
赤峯 友子  
岡野 紘宣  
山口 雀昭  
有村 王志

菜の花の沖にも鮫がいるのだろうか  
推敲の二転三転して夜長  
焼きたてのパンの匂いや風光る  
カップ麺月を浮かべて完食す  
戸締りの手を止め覗く虫の闇  
遠会釈交わすたそがれ稲の秋  
少子化も円安もある秋日和  
山笑い山燃えやがて山眠る  
名月や風は語部岡城址  
草の花けふも誰とも会わぬまま  
戸締りの手を止め仰ぐ月夜かな  
身に入むや時に埋もれしこと多き

本田 圭子  
神 慶子  
森山 秀子  
岡村 君香  
幸谷 恵子  
田中 充  
児玉 利子  
坂本 一光  
上田たかし  
松廣 李子  
佐藤 次江  
田中 充

第二回雑詠句会作品集(点盛)

第2回雑詠句会には76名の会員から228句が集まりました。以下の作品集は、作者を隠してシャツフルしたもの、作者順に並び替えたものです。作品番号の下の○印の中が採られた数(点盛)です。

- 1 ①ざわざわと久住の山のススキ揺れ 大神 愛子
- 2 秋の夕父母恋し星語る 大神 愛子
- 3 休耕田畦に彼岸花目に映る 大神 愛子
- 4 ②名月や地球の石は水の花 坂本 一光
- 5 ⑦山じゆうが燃えて命が連鎖する 坂本 一光
- 6 ④山笑い山燃えやがて山眠る 坂本 一光
- 7 ⑩ひまわりの鬱戦争が終らない 宮川三保子
- 8 ②桜紅葉紅を尽くして地に還る 宮川三保子
- 9 ③銀河澄む骨の崩れる音がする 宮川三保子
- 10 ③稲の花撫でて引き抜く検見役 岡野 紘宣
- 11 ④砂糖きび齧って吐けぬ核の滓 岡野 紘宣
- 12 ①ドローンで覗かれ兵は未黒野に 岡野 紘宣
- 13 ③君の名は浜昼顔に聞いてみる 下司 正昭
- 14 ③南風の雲の果まで鎮魂歌 下司 正昭
- 15 ①爆音はDNAまで終戦忌 下司 正昭
- 16 ③二百十日傾いて立つ弥次郎兵衛 牧野 桂一
- 17 ⑤被弾碑を囲い晩夏海鳴れり 牧野 桂一
- 18 お終いは猿の反省休暇明け 牧野 桂一
- 19 ③鯛雲只今避難訓練中 吾亦紅
- 20 ③吾亦紅風に色なし寂光土 吾亦紅
- 21 ③わらべ歌消してはびこる赤のまま 吾亦紅
- 22 ②稲を刈るたびに小さくなる故郷 足立 攝
- 23 ⑤ダム底の町にも祈り暮の秋 足立 攝
- 24 ③稲刈を終えていずこもがらんど 足立 攝
- 25 緑陰の増して聴こゆるラジオかな 菅 登貴子
- 26 ⑧夏厨強き女のふくらはぎ 菅 登貴子
- 27 ②秋屋台人それぞれの顔をして 菅 登貴子
- 28 鬼灯を鳴らした昭和懐かしむ 小川 良子

- 29 ①冷奴酒の肴に丁度良い 小川 良子
- 30 一墓石取り囲むよに曼珠沙華 小川 良子
- 31 ⑤秋刀魚焼く男涙の美しき 菅 攝子
- 32 ①旅慣れぬ鞆の中の秋扇 菅 攝子
- 33 夕顔や父の忌こもる日の匂い 菅 攝子
- 34 ⑫着崩れを闇にあずけて踊りけり 山口 雀昭
- 35 ④染みついたあんちやの匂ひ更衣 山口 雀昭
- 36 ②茄子馬の脚が背に抜け盆終る 山口 雀昭
- 37 腕をくみ鯛起しまつ漁師小屋 早澤まり子
- 38 母の年越え八十の桜東風 早澤まり子
- 39 悲しみは秋潮にのせ又雨に 早澤まり子
- 40 ⑨いつもより母がやさしい野分けの夜 足立 町子
- 41 ⑬心配の種がぼろぼろ唐辛子 足立 町子
- 42 ⑭村じゅうの夕日集めて稲を刈る 足立 町子
- 43 ④会いたくて来たよこまで曼珠沙華 安田 文
- 44 叱咤する風やさしくもありぬくし 安田 文
- 45 ①もやもやも弾き飛ばして鳳仙花 安田 文
- 46 ①奥畑の案山子倒るる誤算の夜 佐藤 珠幸
- 47 ②稲刈のあと静寂とたたかえり 佐藤 珠幸
- 48 老年の素肌に痛き秋日和 佐藤 珠幸
- 49 ③白魚漁ほつほつ岸を人ゆけり 有村 王志
- 50 ④味わい深い晩年の貌吊るし柿 有村 王志
- 51 米をとく朝方雪が積もるらしい 有村 王志
- 52 ②久方のチキリンコンや夕祇園 原田 勝子
- 53 ①大空に舞うは一ひら百日紅 原田 勝子
- 54 ①さわさわと蔵に音させ竹の秋 原田 勝子
- 55 ②なきがらの鼻につめもの酷暑かな 福田 英子
- 56 ①老猫の膝に脈打つ五月闇 福田 英子
- 57 逃げ果すか戦温暖化電穿つ 福田 英子
- 58 ②雲間にてそとと紅ひく良夜かな 内田トシ子
- 59 ②稲穂ゆれ乗ってみたいいなコロコロと 内田トシ子
- 60 三日月や乙女の顔に匂い立ち 内田トシ子
- 61 ⑥すかんぼを嘔めばよめいても少年 河野 輝暉
- 62 ①投函の音がひばりになつてゐる 河野 輝暉
- 63 ⑤妻は知らずとこころとは涙いろ 河野 輝暉
- 64 ①法被干し一晚寝れば夏祭り 河野 則子
- 65 ①初夏やハヤシライスの金婚日 河野 則子
- 66 ③コップ割れし音に傷つく春の風 河野 則子
- 67 ③八月の空未来と自分変えられる 桐野 力
- 68 ①二つ三つ四つ南瓜畑で生きる意味 桐野 力
- 69 ①八月十五日星野富弘の詩 桐野 力
- 70 ⑨無花果よ庭に小さきエデンあり 藤 万葉
- 71 ①残菊や生の余白を埋めるもの 藤 万葉
- 72 ③しぐるるや点滴液のぽつぽつと 藤 万葉
- 73 ④こだわりは意味のなきもの根無草 高倉 直人
- 74 ビヤガーデン早く涼しくなりたまえ 高倉 直人
- 75 ⑩鯖寿司を買って上りの七号車 高倉 直人
- 76 ポプラ打つアカゲラリズム秋深む 平田千代子
- 77 二度となき雲の形の冬の空 平田千代子
- 78 ①短日や苦勞もありて日を暮らす 平田千代子
- 79 ⑤早春の音が地面で動きたる 赤嶺 広史
- 80 ⑧春愁をちよつと置き去る喫茶店 赤嶺 広史
- 81 四つ角を曲がれば立夏来ておりぬ 赤嶺 広史
- 82 ②だしぬけに萌ゆ曼珠沙華かの恋も 立花真由美
- 83 ①長き夜や肌うるわしきピアニスト 立花真由美
- 84 ⑦冬近し薪を割る音透きとおる 立花真由美
- 85 ④零余子めしお代り三杯笑む母よ 時松ヤスコ
- 86 ③下駄ダンス日田駅前秋並ぶ 時松ヤスコ
- 87 バイオリン独奏会はキリギリス 時松ヤスコ
- 88 ⑩引き算の余生抱えて秋深む 甲斐加代子
- 89 ③飽食に素通りされる山葡萄 甲斐加代子
- 90 ④ゆく秋の三步先行く記憶力 甲斐加代子
- 91 ③かわたれの案山子魔性を潜ませる 吉田 素子
- 92 ⑪柿熟し身の混沌を抜け出せず 吉田 素子
- 93 ③煩惱の色美しき柿落葉 吉田 素子
- 94 ⑧千の風受けて枯野はさわぎだし 御手洗豊海
- 95 ⑤たましいの余韻残していちよう散る 御手洗豊海
- 96 ③生き死にを問うな荒野の冬の蝶 御手洗豊海
- 97 ⑤父の手の温もり今に七五三 河野 洋子
- 98 ⑤秋刀魚焼く天下御免の一軒家 河野 洋子
- 99 醉芙蓉決断にぶる選句かな 河野 洋子
- 100 甲子園若人の夏フルスイング 永松左世美
- 101 稲刈やさつそうと現るコンバイン 永松左世美
- 102 ①無精者きたきりすめに秋が来た 永松左世美
- 103 ⑧暗誦は一行だけの法師蟬 上田たかし
- 104 ⑦売れ残るいわしの鬚にある汚水 上田たかし
- 105 ④名月や風は語部岡城址 上田たかし
- 106 ④石仏がそろりと動く春の宵 本田 圭子
- 107 ④菜の花の沖にも鯨がいるのどううか 本田 圭子
- 108 ⑧ひとことを言えないままに冬の薔薇 本田 圭子
- 109 ⑤これでもかこれはどうだと揚花火 神 慶子
- 110 ④推敲の二転三転して夜長 神 慶子
- 111 ①星月夜何か語れよ逝きし友 神 慶子
- 112 蛸へ時を忘れてトロイメライ 松廣 李子
- 113 ⑤ぎす鳴くや湯上がりの爪あまく研ぐ 松廣 李子
- 114 ④草の花けふも誰とも会わぬまま 松廣 李子
- 115 ⑥断捨離や父の背負いし草刈機 田代 直之
- 116 ②彼岸花崩れしままの文化財 田代 直之
- 117 秋麗やキャンセル待ちのバス旅行 田代 直之
- 118 ②電柱にのうぜんかずらの登り龍 佐藤 次江
- 119 ⑤艶やかに赤トウガラシの自己主張 佐藤 次江
- 120 ④戸締りの手を止め仰ぐ月夜かな 佐藤 次江
- 121 ②牛の瞳に流れゆく街秋の暮 森山 秀子
- 122 ④焼きたてのパンの匂いや風光る 森山 秀子
- 123 ⑤古書店の店主を覗く初燕 森山 秀子
- 124 ④一番しゃやくてもいいよ月の道 岡村 君香

155154153152151150149148147146145144143142141140139138137136135134133132131130129128 127 126125

④カップ麺月を浮かべて完食す 岡村 君香  
 ③古妻や小言戯言法師蟬 岡村 君香  
 孫の夏極楽みたる馬來西亜<sup>マレーシア</sup> 菅 勲  
 ①盆太鼓四万人の手を揺らす 菅 勲  
 芙蓉咲き高き竜の声を待つ 菅 勲  
 ⑨太陽を閉じこめているトマトかな 安森 範明  
 ①ウオーキング急ぎ立てられて蟬時雨 安森 範明  
 玄関に朝顔置きて客を待つ 安森 範明  
 ①一筆の秋雲かかる阿蘇の岳 時松由美子  
 ②青竹踏朝の背筋や赤トンボ 時松由美子  
 ①吾亦紅地味なあめの娘は紅をさす 時松由美子  
 ⑫でで虫や来世は翅をつけて飛べ 高橋 玲子  
 ⑧悔しさも生きる力や蟬の爪 高橋 玲子  
 ⑨独り居にいつしか友となる金魚 高橋 玲子  
 ⑭秋天へ重いものから捨ててゆく 高橋 玲子  
 ②鬼灯を唇で噛み母を恋ふ 高橋 玲子  
 ⑦長電話遠くで同じ月をみて 高橋 玲子  
 ①迷いつつ薔薇の剪定深くする 高橋 玲子  
 葉桜となり目をとじる磨崖仏 高橋 玲子  
 ⑤ひとしきり咲いて静かな薔薇でいる 高橋 玲子  
 ②真夜中の指の激痛大百足 高橋 玲子  
 蝸やホームシックなああの頃を 高橋 玲子  
 ①A Iの指示に動く防災の日 高橋 玲子  
 ⑧主婦という服を脱ぎ置く夏の果て 高橋 玲子  
 ⑩もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ 高橋 玲子  
 ⑤虫の音を海馬におさめ夜化粧 高橋 玲子  
 ④夏帽子粋に坂道二度ころぶ 高橋 玲子  
 ②福島のこれより先はまだ残暑 高橋 玲子  
 ⑥逝く空を毀さぬように青栗蹴る 高橋 玲子  
 ①案山子抜くころうさんと口に出し 高橋 玲子  
 ②とりどりの案山子の使命村起こし 高橋 玲子

186185184183182181180179178177176175174173172171170169168167166165164163162161160159158 157 156

⑥耳のない案山子に届く子らの声 衛藤 俊一  
 ①海猫の住む経島<sup>ふみしま</sup>や秋澄めり 衛藤 俊一  
 ②そこここに転がる青柿の反乱 衛藤 俊一  
 ①有料の空へはじける大花火 衛藤 俊一  
 ⑤黄砂ふる地球の吐息か空仰ぐ 衛藤 俊一  
 ①日を返す旧家の壁や梅雨明ける 衛藤 俊一  
 ⑭鶴折りても折りても足りぬ八月よ 衛藤 俊一  
 ③ふるさとには「メサ」なる山の夏閉まり 衛藤 俊一  
 ④戸締りの手を止め覗く虫の闇 衛藤 俊一  
 ①名月や湯呑みの工面つかぬまま 衛藤 俊一  
 ③シャソンの息吹に惹かれ枯れ葉舞う 衛藤 俊一  
 あの暑さなんだったのよ彼岸花 衛藤 俊一  
 ②百日紅手向けの供花や妹忌 衛藤 俊一  
 ①ありし日の義母との諍い藍浴衣 衛藤 俊一  
 ⑩満月の妖しき中へ老いてゆく 衛藤 俊一  
 ②処理水や言葉も出せぬ初秋刀魚 衛藤 俊一  
 ①味噌汁やカボス絞りに御代りす 衛藤 俊一  
 初栗を七つ拾いて味見かな 衛藤 俊一  
 ①鶏頭花凶太く生きる石割め 衛藤 俊一  
 横断歩道の路面の粒が蟻のよう 衛藤 俊一  
 夏本番のお祭りも来て語りぐさ 衛藤 俊一  
 ②茄子の花風が訪ねている暑さ 衛藤 俊一  
 ⑦敬老日あたりまえと言う贅沢 衛藤 俊一  
 ③糶田やふた月会わぬ子の背丈 衛藤 俊一  
 ①西見さあの日旅立ったあの場所へ 衛藤 俊一  
 ⑫ふり返るための坂道葛の花 衛藤 俊一  
 ⑨実さくつが空の青さへはみ出しぬ 衛藤 俊一  
 琵琶の洲の秋を集めるかいつぶり 衛藤 俊一  
 ①白と黄の揚羽離れず勘当よ 衛藤 俊一  
 虫時雨眼裏に見ゆペンライト 衛藤 俊一  
 ①雲走り月逆走す間に合わぬ 衛藤 俊一

218217216215214213212211210209208207206205204203202201200199198197196195194193192191190189188187

②柿五切小鹿田皿にて句座の卓 井上 則子  
 ⑥新米の光るひと粒つまむ箸 井上 則子  
 ⑧放棄地の芒は風に抗いて 井上 則子  
 常夜灯夢にめざめて虫の鳴く 井上 則子  
 ⑤陽にまみれ土にまみれし母九月 井上 則子  
 ①なれそめは秘密のままよそぞろ寒 井上 則子  
 ①二重虹明日は良き事予感せり 井上 則子  
 露草の白き朝露ひかりおり 井上 則子  
 山の端と住み家を架ける二重虹 井上 則子  
 ⑬食べごろを逃れしオクラ天を突く 井上 則子  
 ③日の本を絡めとりおり葛かずら 井上 則子  
 ③ろうそくの消える刻まで敬老日 井上 則子  
 晩節の重み千鈞胡桃割る 井上 則子  
 ④遠会釈交わすたそがれ稲の秋 井上 則子  
 ④身に入むや時に埋もれしこと多き 井上 則子  
 ①額紫陽花四人五人と足を止め 井上 則子  
 ⑧田を守り村を護りて風薫る 井上 則子  
 ③祖父の死の無沙汰を叱る涙かな 井上 則子  
 ⑥人生の余白を活かす後の月 井上 則子  
 ⑤みの虫の袋をひとつあけてやる 井上 則子  
 ③逆上りの中年が抱く翳雲 井上 則子  
 ①四年ぶり集会場の敬老会 井上 則子  
 もう見頃すぎたか棚田の彼岸花 井上 則子  
 秋雨去りコンビニ傘をもちてあます 井上 則子  
 ②上弦の月をデコピンする妻よ 井上 則子  
 菊まつり友と笑うの三度目よ 井上 則子  
 我も我もシャインマスカット食す人 井上 則子  
 ①鬼灯を鳴らす子の背に茜雲 井上 則子  
 ③三陸のなみだの海に翳群る 井上 則子  
 ②爽秋や赤いヒールで君を待つ 井上 則子  
 ⑤湯煙を懐にして山眠る 井上 則子  
 ①すらすらと句を授かりし初夏の夢 井上 則子

## 第二回雑誌詠句会・選&選評

◆順不同◆

2232222221220219  
 ①大木の影に苔むし馬貞句碑 藤澤 泉溪  
 ①稲刈はお国の基本日本晴れ 児玉 利子  
 ④少子化も円安もある秋日和 児玉 利子  
 ②ユニクロを着せられて立つ案山子たち 児玉 利子  
 蓑を着て案山子踊れば雀来る 稲田久美子

228227226225224  
 ⑤おにぎりの数だけほしい秋日和 稲田久美子  
 ②秋日和歳の数だけひとりじめ 稲田久美子  
 ⑥マロングラッセ一粒分の秋の恋 小野みち子  
 ②なき夫と今宵の月を酌み交わす 小野みち子  
 秋灯が一人暮らしに強すぎる 小野みち子

当協会の年三度の通信句会は、会員であれば誰でも投句できますし、選句や選評は投句していない人を含めて誰でも参加できます。今回は選句をされたのにご自分の名前を書き忘れた方、選句数(10句)を間違えた方が複数いました。選評は掲載の都合でわずかに割愛等の変更を加えたものがあります。

小川 良子 選

《41・72・85・94・115・122・156・188・193・203》  
 85 零余子めしお代り三杯笑む母よ (時松ヤスコ)

零余子めしを三杯もお代りして笑う女の肝っ玉に感動しました。

安田 文 選

《5・21・40・70・92・114・138・139・196・201》

岡野 紘宣 選

《84・96・97・110・142・179・181・182・184・215》

菅 攝子 選

《22・62・115・148・150・153・178・181・203・224》

菅 登貴子 選

《31・43・47・65・67・92・97・124・136・207》

足立 攝 選

《7・34・40・61・107・113・136・159・170・226》  
 107 菜の花の沖にも鮫がいるのだろうか (本田 圭子)

金子兜太「梅咲いて庭中に青鮫が来ている」のオマージュ。この兜太句はなぜか難解と言われ、兜太自身がおせっかいにも自句自解を残したものだから「青鮫は兜太自身の生命力である」などの外的な評をする専門家が後を絶たない。素直に書かれたまま理解すれば、誰でも分かる。二月の庭の空気感であるのに、自分の独自解釈を誇示する自称専門家はうるさいし見苦しい。その点この作品は大変素直で、兜太作品の良さを本質的に理解している。さささーと風紋を作りながら吹き抜ける菜の花畑の風。そこにもきつと兜太の青鮫が来ているに違いない。

神 慶子 選

《17・22・40・41・42・123・139・149・162・181》

牧野 桂一 選

《34・42・84・110・125・130・140・150・182・224》  
 34 着崩れを闇にあずけて踊りけり (山口 雀昭)

盆踊りの一コマがしっかりと切り取られているので踊る姿が見えるように浮かびあがってくる。なんといっても「着崩れを闇にあずける」という表現が、実景を实景以上に描写していて、詩情を高めてくれる。

言葉としては「着崩れ」も「闇」もマイナスイメージであるが、それを「踊りけり」で見事に逆転しているのは、「けり」の働きである。俳句の伝統をふまえながら、実を描ききっていると、人間の普遍的真実を象徴的に描ききっていると、ところに強くひかれた。

平田千代子 選

《6・7・42・70・71・84・130・160・182・222》

小野みち子 選

《13・61・79・90・107・136・139・144・158・181》

福田 英子 選

《17・19・36・61・106・109・113・137・162・182》

宮川三保子 選

《10・20・50・61・96・115・124・137・151・171》  
 50 味わい深い晩年の貌吊し柿 (有村 王志)

皮をむき吊し柿を作る。作業中は水々しく新鮮な柿であるが、軒下に吊し太陽や風を受けて少しずつシワを重ね干し柿になっていく。上五

が宇余りの感じもするが、それに続く中七の晩年の貌になっていくと言うとらえかたが良いと思う。干し柿を晩年の貌として比喩にもつてきた視点も良く印象に残った作品であった。

山口 雀昭 選

《16・29・31・59・109・111・131・178・202・225》  
16 二百十日傾いて立つ弥次郎兵衛

(牧野 桂一)

当方の県南俳句大会の印象吟は弥次郎兵衛でしたが、いろいろな弥次郎兵衛の見方があって大変おもしろかったですが、二百十日の発想が奇抜ですが、二百十日と弥次郎兵衛の関係は特にあるのですかな？

有永真理子 選

《22・23・34・88・90・103・108・136・141・151》  
90 ゆく秋の三步先ゆく記憶力

(甲斐加代子)

記憶力の低下に、年相応の「もの忘れ」か「認知」なのかと気になる昨今、今の自分の不安を言いあてられたような句です。「一步」ではなく、「十歩」でもなく「三步」が落としどころだったのでしょうか。作者のユーモラスな表現に脱帽です。

大神 愛子 選

《20・43・84・88・126・134・138・168・180・204》  
204 祖父の死の無沙汰を叱る涙かな

(福井トミ子)

コロナ禍での四年間、祖父が他界されたのかな？ あなたが流した涙、祖父はきっと喜んで

くれたと思います。これからも手を合わせて、祖父の安らぎをお祈りしましょう。私も五才上の兄が県外で亡くなったけど、コロナで面会も葬儀も行けず、星を仰ぎて声をかけています。

下司 正昭 選

《17・69・137・162・221》  
162 鶴折りても折りても足りぬ八月よ

(有永真理子)

令和五年第二回雑詠句会は時期的に終戦忌を詠んだ句が多いと思ったが少なかった。かつての大戦を知る人が今や国民の1%と言われている現在戦争はすでに風化しているのだろうか。そんな中でのこの句は折鶴に込めた鎮魂と平和への思いが如実に表現されていて胸を打った。私もこんな句が詠めたらいいなと思った。

「只今！」の声は風音原爆忌面影幼き子等は還らず。この歌をみて涙が止めなく流れた昔を思い出しました。

河野 輝暉 選

《9・23・31・41・66・70・93・103・137・226》  
93 煩惱の色美しき柿落葉

(吉田 素子)

仏語の煩惱にはいい気はしない。世俗に心身の悩みを焦がし数は百人もあると言うから。それを何と此の句では、煩惱の色が美しい、と賛美しているのだから難解になり、衝撃をうける。

「煩惱即菩提」という言葉が当て嵌まるのだろう。深刻さを逆手にとつて軽妙に美化し、平明に表現した度胸と技巧に驚かされる。底流にどこかオプチズムさえ漂わせ。「紅葉散る煩

悩去つて認知症」との川柳と通底し、悩みが愉快な二投流の傑作。

陣野千恵子 選

《34・42・84・88・148・181・182・196・211・224》  
182 実ざくろが空の青さへはみ出しぬ

(石橋紀公子)

晴れわたった秋空。雲一つない、澄み切った青い空にたわなに実ったざくろ。空の青とざくろの赤紫が鮮明に見えてきます。中七、下五の空の青さへはみ出しぬの表現がすばらしい!!

有村 王志 選

《5・13・92・103・136・141・144・181・182・206》  
92 柿熟し身の混沌を抜け出しぬ

(吉田 素子)

この句、何か彷彿とした完成度の高い詩想を感じる。熟柿という完熟しているがゆえに混沌とした様々な想いの輻輳する社会、そこから抜け出してゆけたとした力強い感性の作品である。

佐瀬 隆義 選

《7・11・17・22・56・70・80・103・108・115》  
80 春愁をちよつと置き去る喫茶店

(赤嶺 広史)

画集でも眺めながら毎朝のコーヒーが楽しみです。美しいカフェーの写真集も沢山出版されている。片岡義男の「珈琲が呼ぶ」を読んでいると、いろいろなコーヒーにまつわるエピソードにこころ和みます。

そんなことでも思いつながらこの句を味わいました。マスターの趣味の良さが店内を明るくし

ている。いつしか憂さも忘れて、「春愁をちよつと置き去る」の巧みさ、共感しきり。この人と一緒に喫茶したくなりました。

### 吾亦紅選

- 《6・42・55・73・90・92・119・136・144・216》  
216 爽秋や赤いヒールで君を待つ  
(陣野千恵子)

高いヒールに心ときめきを識る。

### 立花真由美選

- 《66・80・88・92・123・130・150・165・170・203》  
150 虫の音を海馬におさめ夜化粧  
(鎌倉真由美)

中七の「おさめ」の力まない、静かな表現が下五の「夜化粧」を際立たせていると思います。脳の花は、本能的な行動。記憶を担う器官とことらしいです。

酷暑で長かった夏も終わった夜長、本能的に虫の音を聴き、本能的に夜化粧をする……秋のひと夜の妖艶な調べに魅せられました。

### 岸本千鶴子選

- 《10・15・16・22・26・55・88・106・123・224》

### 佐藤優美選

- 《42・80・82・108・110・130・138・162・191・226》  
162 鶴折りても折りても足りぬ八月よ  
(有永真理子)

平和を折りつつ千羽鶴を折っている作者。過去のヒロシマ、ナガサキの為に、また世界の各地で起きている紛争、中でもロシアとウクライ

ナの戦争の平和のために、折っても、折っても足りないのだ。いつこの地球上から紛争が無くなるのか、戦争が無くなるのか、ただ祈るしかないのか。私たちは日本と米国が戦争準備に邁進しているのを断固阻止しなければならぬ

### 桐野力選

- 《22・42・75・102・113・120・130・162・181・206》  
181 振り返るための坂道葛の花  
(石橋紀公子)

人生には坂がある。上り坂、下り坂、そして、突然やってくる「まさか」これは誰の言葉か定かではありませんが、ルーツは仏教とか。葛の花は秋の七草の一つとして万葉集にも。そして花言葉は「活力」、余韻に浸れます。

### 岡村君香選

- 《31・42・73・88・92・94・105・115・119・139》  
139 秋天へ重いものから捨ててゆく  
(赤嶺 信子)

人生はいろいろあるけれど、あの秋の清々しい青空に重いものから捨てて身体も心も軽くして良いんだよ。食べたいものを食べて、やりたいう事にチャレンジして、自分らしく楽しめば良いんだよと、背中を押され、勇気をいただきました。ありがとうございます。

### 佐藤次江選

- 《66・84・88・122・162・177・181・188・196・217》  
181 振り返るための坂道葛の花  
(石橋紀公子)

坂道は登り？下り？登りなら振り返って、

「頑張つてよく登ってきたなア」と思い、下りなら振り返って「登りきつて、よい景色も見たのだから、ゆっくり楽しみながら下ろうか」などと思うのでしょうか？ 人生の坂道も時々足を止めて振り返ってみるのもいいかも？

### 清家元幸選

- 《49・53・75・83・97・98・123・157・204・208》  
49 白魚漁ほつほつ岸を人ゆけり  
(有村 王志)

白魚漁は春の風物詩で、春を告げる船となる。白魚は祝いの席で酢醤油に生きたまま入れて、躍り食いをするのが又、珍味である。透明な姿で川を上って来る船の漁で、春の訪れを感じる風情である。番匠川での白魚漁を思い出される句で、春が来た事が感じられる作品。良い句だと思います。

### 井上則子選

- 《26・34・79・104・109・149・162・163・171・217》  
149 もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ  
(鎌倉真由美)

もぎたてのトマトにいったい何が起こったというのだろう。何度読み返してもわからず、何度読み返しても「ふふふ」としか……。

### 田中充選

- 《22・34・88・95・110・121・136・138・162・164》  
136 でで虫や来世は翅をつけて飛べ  
(高橋 玲子)

蝸牛は童謡や俗謡で歌われるだけでなく、俳句でも昔から好んで詠まれてきた。この身近な

小動物は雌雄同体で移動距離が短い、もし翅があれば行動範囲が広がり新たな世界を見ることになる。また、翅のある蝸牛には俳句の創作意欲をさらに掻き立てられる。この句より、梁塵秘抄の「舞へ舞へ蝸牛」で始まる囃子歌が頭に浮かんだ。来世に蝸牛が翅をもてば、子ども達にはやされることもなく花の園まで自力で飛んで行くことができる。

赤嶺 広史 選

≪5・24・34・42・70・92・149・151・170・189≫

本田 圭子 選

≪22・34・41・84・109・122・136・137・161・205≫

早澤まり子 選

≪78・79・80・88・108・124・149・170・177・205≫

108 ひとことを言えないままに冬の薔薇

(本田 圭子)

気持ちわかります、人それぞれとは言っても、弁舌の上手な人がいます。私も一言いいたければ言い返す隙を見つけられない、言われっぱなしありますよね。後で思い出しても口惜しさがわいてきます。寒さに負けずに健気に咲いている薔薇を見て心がいやされるでしょう。

天田 泉美 選

≪5・26・75・80・88・90・119・139・189・216≫

26 夏厨強き女のふくらはぎ

(菅 登貴子)

幼い頃の農繁期の台所での母の姿が浮かんだ。それも土にまみれた野良着のまま。半世紀も昔

になると農家の台所は外とつながる土間だった。農作業に休み休むことなく台所に立つ。頑張ると言えば聞こえはいいが、作業の担い手として働かざるを得ない、そんな時代だった。作者は、女性のふくらはぎにフオーカスし女性の強さを詠み、その時代や背景を思い起こさせてくれた。心に残る一句となった。私の母のふくらはぎもきつと……。

吉光 好美 選

≪4・63・75・98・119・130・148・156・160・188≫

河野 洋子 選

≪34・79・90・103・141・148・160・197・219・221≫

原田 勝子 選

≪24・95・115・154・164・166・179・196・200・222≫

安部ユリ子 選

≪22・41・58・73・75・116・130・141・170・203≫

田代 直之 選

≪16・22・26・40・41・88・90・139・148・162≫

40 いつもより母がやさしい野分けの夜

(足立 町子)

母のやさしさを野分の夜に抱いた作者の感受性に共感を覚えます。台風が接近しているから今夜は早目にご飯を食べて、久し振りにお母さんと一緒に布団に入って甘えているそんな光景が浮かんできます。

そして毎年台風の子供の頃の記憶が甦ってきて、やさしかった母の事を偲んでい

る優しい作者を想像しています。

足立 町子 選

≪22・49・61・104・126・139・153・181・196・206≫

206 みの虫の袋をひとつあけてやる

(白土 正江)

池田澄子に「ピーマン切つて中を明るくしてあげた」という句があるが、この句もまさに作者の究極のおせっかいの句だ。「暗い袋の中ではつまらないよ、外に出ようよ、楽しまなきゃ！」ちなみに雌は一生袋の中で過ごすそうだ。

川西 達子 選

≪7・23・88・98・105・107・139・153・178・227≫

7 ひまわりの鬱戦争が終わらない

(宮川三保子)

ほんとうに未だ終わらない戦闘。ロシアのウクライナ軍事侵攻をはじめ、中東でもまた戦争、紛争が絶えない。

ウクライナは肥沃な土地に色々な農産物を生産しているらしい。ひまわりが一面に広がる映像を目にしたことがある。「ひまわりの鬱」が一刻も早く晴れますようにと祈りの句と受け取りました。同感です。

生野 義晴 選

≪50・75・89・94・145・153・166・179・182・189≫

166 シャンソンの息吹に惹かれ枯れ葉舞う

(谷本 親史)

上五・中七の語順によって下五の「枯れ葉」のイメージの寂寥感が薄れて、ロマンチックな詩情豊かな光景へと激変するように感じられま

した。バレエダンサーの軽やかなステップさえもがありありと、ミュージカルの一シーンとして目の当りにしているような感覚に捉われます。作者の心豊かな感性に脱帽です

### 永松左世美 選

《40・86・88・90・126・152・192・200・205・221》  
古妻や小言戯言法師蟬

(岡村 君香)

私は奥様のみかたですよ。仲良くして下さいませ。

### 赤峰佐代子 選

《14・22・88・114・123・136・138・141・164・203》

### 佐藤 律子 選

《26・40・41・64・75・104・120・136・169・196》

### 佐々木 玉 選

《9・19・22・34・41・91・158・182・196・226》  
食べごろを逃れしオクラ天を突く

(赤峰佐代子)

オクラは何の料理にしても美味しいので好きな食べ物です。時期が過ぎると固くなりどげどげが痛い。取り損なつたオクラが、ツンと天を向いている様子が目に浮かびます。

### 佐藤 哲夫 選

《22・31・35・42・89・90・94・144・188・198》  
新米の光るひと粒つまむ箸

(井上 則子)

最近我家でも時々朝食にパンとコーヒーが

出ます。私は農家の友達から毎年新米をいただきます。それを炊いて仏壇に捧げます。その器の表面一杯の粒が光り輝いているのです。そして先祖に手をあわせませす。この気持を友に美味しいお米ありがとうございます。

### 松廣 李子 選

《26・42・58・61・82・108・121・149・191・224》

### 高橋 玲子 選

《7・23・35・40・63・73・89・147・149・191》  
AIの指示に動く防災の日

(佐々木 玉)

現在の世相を風刺した重さを感じた一句。人が人として生きる喜怒哀楽を失いロボットと化する社会を想像してしまう。神話の多い我国の神祕を抗わず心情だけは化学、機械に奪われぬ地球であつてほしいと思う一句です。

### 内田トシ子 選

《21・88・95・96・109・120・151・156・186・206》  
これでもかこれはどうだと揚花火

(神 慶子)

皆が待ち詫びた花火大会、それに応えようと各名所は、趣向を凝らし、色、型、大きさと主催者側の意気込みを感じる。

### 名前不明 選

《6・11・12・49・79・86・91・178・187・189》

### 甲斐加代子 選

《80・119・138・139・148・149・152・153・162・196》

### 河野 則子 選

《34・54・68・88・90・113・156・181・207・214》  
鬼灯を鳴らす子の背に茜雲

(陣野千恵子)

日本人の持つ郷愁をこれほど簡単にやさしく表現したことに感心した。まず鬼灯をイントロに茜雲と視覚とが美しく共鳴している絶妙さがたまらない。「子の背」にスポットを当てたところに親の愛情がしみじみと感じとれる。千昌夫の歌う代表作「夕焼雲」を口遊みたくなった。スマホやAIの虜になる現代と対比してみる時、本句は鋭く世情を衝いていると思うのは深か読みだろうか。

### 安森 範明 選

《10・22・27・86・134・138・145・178・187・200》  
青竹踏朝の背筋や赤トンボ

(時松由美子)

竹踏は健康に良いと言われ私も行っているが、ポイントが背筋を伸して踏むことが重要であると教わった。恐らく作者も今日も健康を願って、背筋を伸して青竹を踏んでいると想像します。いつまでも元気でいきましょう。

### 藤 万葉 選

《11・14・34・41・75・103・136・150・163・218》  
暗誦は一行だけの法師蟬

(上田たかし)

法師蟬が鳴く声を暗誦すると捉えた所が、面白いです。まさに神様に教つた一行ばかりをツクツクボーシツクツクボーシと音読しているようです。そしてそのまま名前になったストーリー

もあり愉快です。

鎌倉真由美 選

- 《21・26・35・90・92・103・113・114・163・226》
- 113 ぎす鳴くや湯あがりの爪あまく研ぐ  
(松廣 李子)

バスローブから覗く肌はピンク色に染まり、  
得もいわれぬ色香をかもし出している。なんて  
事はどこにも書いていないのですが、あまく研  
ぐの「あまく」が上手い。

キリギリスの鳴き声を聞きながら、女の夜は  
ふくらんでいくのでしょうか。

高倉 直人 選

- 《42・104・108・137・138・139・178・182・189・191》
- 137 悔しさも生きる力や蟬の爪  
(高橋 玲子)

人生楽しいことよりも、苦しいこと、悔しい  
ことのほうが特別印象に残る。その苦しみ悔し  
さをバネにして、力強く生きていく様に共感し  
た。蟬の爪のトゲトゲは、悔しさを一段と引き  
立たせている。

坂本 一光 選

- 《7・9・22・42・43・67・88・97・201・204》
- 43 会いたくて来たよここまで曼珠沙華  
(安田 文)

大切な人を亡くす。さびしい限りです。しか  
し、「花を持ち会いに行きたい人がいる」、と  
思えるのは、「人は逝き遠くて近いひとになる」  
からです。誰にも何人も、遠くて近い人がいま  
す。この句を読んで、私も、花を持って会いに

行こうと思いました。

上田たかし 選

- 《7・14・41・107・124・125・162・170・207・215》
- 41 心配の種がぼろぼろ唐辛子  
(足立 町子)

ロシア対ウクライナ。イスラエル対イスラム  
組織ハマス。旧統一教会の二世など、大きな問  
題から、日常生活におけるさまざま事件。他  
の人々がどんなに苦しんでも、自分が良ければ  
という身勝手な生活が、多くの人々を苦しめて  
いる現実を捉えている。傲慢な一部の人によつ  
て、生活に苦しむ様子が「ぼろぼろ」の措辞に  
よって分かりやすく表現されている。

加藤 征孝 選

- 《13・42・50・70・72・130・168・170・196・203》
- 168 百日紅手向けの供花や妹忌  
(谷本 親史)

あれは何年前か？五年も前だろう。一瞬にし  
て死んでしまった。妻の妹であつて、家は隣に  
建てて貰った。いつも行き来していたのが「私  
は死ぬかも知れん」と言っていた。私も家族も  
ましてや旦那もそう想っていなかったが、所が  
言い当てた本人がそこにいた。まさか？との想  
いが今でも思い出す。「姉さんの所へ」と言っ  
てくれたことが、何回もある。娘が帰って「不  
便だなあ」と言う。何もかも不便だ。

竹下美津子 選

- 《34・36・41・108・130・196・197・201・226》

林 香澄 選

- 《7・11・34・52・63・70・75・106・139・211》
- 211 上弦の月をデコピンする妻よ  
(原 春蘭)

月をデコピンしてみたい。そして、それに気  
づく夫がほしい。

御手洗豊海 選

- 《27・42・67・118・138・155・203・205・217》
- 27 秋屋台人それぞれの顔をして  
(菅 登貴子)

秋寒くなつてくると屋台のコップ酒が良くなつ  
てきます。おでんを食べながらの楽しい時を過  
ごしたことを思い出します。

客も主人もそれぞれの人生を歩んでおり、さ  
りげない会話を交しながらの情景がうかびます。

時松由美子 選

- 《42・85・88・90・98・125・156・172・188・196》
- 156 耳のない案山子に届く子らの声  
(衛藤 俊一)

作者の心のあたたかな気持、子らのお元気な  
楽しそうな、きつと案山子がよろこびそうな声  
を届けたかったのでしょうか。本当に心のあたた  
かな作者の気持がうれしかったです。

吉田 素子 選

- 《7・50・80・94・103・105・116・150・217・221》
- 7 ひまわりの鬱戦争が終わらない  
(宮川三保子)

破壊されたビル群の瓦礫、地獄絵そのままの  
戦争が続いています。日本もこれ迄、略奪の歴

史をくり返してきました。足るを知らない人間の欲望への嘆き哀しみ、それをひまわりに重ねたところに心を惹かれます。この句の場合、他の花でなくひまわりが一番合っていると思います。早く早く戦争が終りますように。

### 菅 勲 選

《22・72・93・95・105・140・156・174・188・198》

### 石橋紀公子 選

《7・19・26・35・43・63・106・153・189・206》

153 逝く空を毀さぬように青栗蹴る

(赤峯 友子)

散歩の途中であろう作者は、まだ青いままで落ちてしまった栗を蹴っている。志半ばで生を終えたであろう身近な人の死へのやるせなさ、青栗を重ねながらも「逝く空を毀さぬように」とそっと蹴っている。短い表記の中に、深い哀悼の思いが感じられる良い句と思いました。

### 赤峯 友子 選

《22・41・63・80・90・108・136・149・170・227》

(甲斐加代子)

最近の悩みは物忘れとなかなか覚えられないことだ。今や認知症は高齢社会の社会問題となっている。記憶力がゆく秋のさらに三步先を行くとの表記が妙である。ゆく秋の季語がさみしさと共に時の流れを表わし、よく合っている。「三步先行く」と老人力がついてきたのだと前向きにとらえた所がおもしろいと思った。

### 國廣 精膳 選

《8・23・92・97・104・122・148・155・160・215》

97 父の手の温もり今に七五三

(河野 洋子)

十一月初冬、子どもの健やかな成長を願う七五三。親となり、我子の手をひく時、またそのような光景を見る時、自分が子どもの頃父に手をひかれ神社へ参った頃の父の手の温もりは、何十年経っても忘れられないものであろう。

ひよっとしたら、この父は他界しているのかもしれない。父の人間的温かさが、いつまでも忘れられないかのような句である。中七の「今に」が、この句を引き立たせている

### 山本悦子 選

《6・22・34・75・92・125・139・141・181・197》

### 幸谷恵子 選

《5・22・42・90・149・160・162・189・196・203》

162 鶴折りても折りても足りぬ八月よ

(有真理子)

広島忌、長崎忌、終戦日と続く悲しみの八月、平和を願う千羽鶴では悲しみは癒えない。それでも折り鶴に平和を託す。作者の嘆きが怒りが伝わって共感する。

### 加納 知子 選

《17・40・70・91・114・118・141・162・198・201》

162 鶴折りても折りても足りぬ八月よ

(有真理子)

本当にどれほど折ったら、鶴の願いが叶うのでしょうか。人は人を傷つけ、地球を傷つけ、

天空にも宇宙のゴミが散乱していると言います。

今年には紅葉もすっかり色あせて、来年は秋が来ないのではないかと不安です。若者の間に未来への不安が広がっているとのこと。原爆の記憶は薄れ、又戦争が戸口に佇んでいるかのようです。年老いた自分に出来る事があるだろうか。鶴を折ることしか出来ないのが悲しいです。

### 夢野はる香 選

《32・41・42・46・98・137・139・149・170・181》

### 志賀 文子 選

《1・47・52・59・85・94・120・139・166・225》

120 戸締りの手を止め仰ぐ月夜かな

(佐藤 次江)

澄み渡った夜空を見上げて、見とれてしまう月の光の美しさ。一日が無事に終って、しみじみと幸せ感にひたるひととき。明日も穏やかな日を祈っている。静かな夜に思いを巡らせているようです。すがしい作品です。

### 時松ヤスコ 選

《45・88・92・133・135・164・178・196・205・217》

### 福井トミ子 選

《5・8・42・85・94・104・170・189・200・220》

104 売れ残るいわしの翳にある汚水

(上田たかし)

売れ残るいわし。日本国内でも、心の隅では心配の種となっている。毎日の新聞を眼にしても、暗いニュースが多すぎます。核を耳にするだけで輸入に反対する中国と同じく、日本国内

でも不安な気持は拭えないように思います。文  
明開化も果しがないのでは、と私は思います。  
安くて美味であるいわしに翳は残念です。翳を  
的確に捉えて良い俳句でした

### 大村 和代 選

《4・5・20・70・93・94・95・128・191・205》

いたことだが、そろそろ主婦を卒業してもいい  
ころかなと思っている。子ども達もみんな手が  
かからなくなってきた。私は私のやりたいこと  
をするため主婦という服を脱いで社会復帰して  
みたい。そしてやりたいことが実現した暁には  
また、この家に帰ってくるのだ。だから主婦の  
服は脱ぎすてないで置いていくことにする。

### 白土正江 選

《22・24・40・88・90・104・137・144・148・162》

148 主婦という服を脱ぎ置く夏の果て

(鎌倉真由美)

暑かった夏もあと少しで終わり。私の好きな  
さわやかな秋が近づいてくる。前々から考えて

※今回のゲスト選者は以下の方々です。

・佐瀬 隆義 様 (「石」時代からの俳人)

・佐藤 優美 様 (津留句会)

・山本 悦子 様 (「天籟通信」編集長)

・夢野はる 香様 (「天籟通信」)

## 令和五年 『自薦作品』 選句用作品集

新会員から「自薦作品」と第一回、第二回「雑詠句会」の違いが分からないという質問があり  
ました。結論を言うと、募集の時期が違うだけで同じものです。当協会は協会内の勉強会とし  
て年三回の通信句会を行っています。参加不参加は自由ですが、時間を作ってぜひ挑戦してく  
ださい。今回は全290作品からの10句選です。選句要領は巻末に記載しています。

小川 良子

1 さつまいもほくほくしての焼き芋かな

2 赤と白庭一面の曼珠沙華

3 鬼灯を唇でかむ母がいる

岡野 紘宣

4 冬眠を前にせかせる土起し

5 パン食うて青刈り稲は牛の餌

6 家族葬菊の陰よりややの声

7 船外機パンパンと冬叩く

安田 文

8 混沌の戦禍未だに冬の海

9 積雲のふわりふわりと天高し

10 物原にしげる露草輝かし

11 田舎には田舎の妙味ささげ飯

菅 攝子

12 分葱茹で朝の青さを確かめる

13 針穴を覗けば郷の春祭り

14 新茶汲む君の齢や透きとおる

15 小豆干す故郷の空の見えるまで

菅 登貴子

16 玉椿祖母の素顔を懐かしむ

17 若水や喉とおす日の静かなり

18 母の摘む春菊の香や優しき香

19 カリフラワー初めて会話する厨

牧野 桂一

20 銀河の尾きらきら絵本飛び出して

21 先生はいつも普段着夜学の灯

22 障子の灯踊れる五指のシルエツト

23 桃を剥くバトン少女のバトン立て

24 散りぢりの友にヤッホー鱗雲

25 痩せた手で九月の痩せた蚊を叩く

26 冷たくてすました月に投げるキス

27 葬よりの帰宅の夫に梨を剥く

28 この道を行くと決めた白吾亦紅

29 血筋の消えたふる里白い秋

30 一粒の種の重さや稲穂垂る

31 耐える事にすこうし疲れびわの花

32 秋灯をガザの祈りが埋めてゆく

33 燃えるものみな美しき神楽月

34 内視鏡するりと師走まで伸びる

35 LINE打つ指に冬日を少し足す

36 かたつむりなぜか電線渡りおり

37 海に見る磯の香りの天の川

38 デデポップと野鳩なきしか鳩吹か

39 紙漉きて今日も暮れ行く村の里

山口 雀昭

- 40 息白し星空仰ぐ午前四時 大神 愛子
- 41 骨折の痛みも忘れ木枯らしや
- 42 五年ぶり再開の弟白髪増え
- 43 虹かかる逝きし母の年越した今 平田千代子
- 44 ゆらゆらと三日月の舟西へ向く
- 45 遠い日の吾が一世なり秋深し
- 46 コスモスは群れ咲きてこそ美しき
- 47 タぐれてとぎれとぎれの虫の音 下司 正昭
- 48 霧となる焼跡闇市戦中派
- 49 略農の集落絶えて花芒
- 50 村にまだやさしさ残る木守柿
- 51 レノンの忌アビーロードはとこしえに 河野 輝暉
- 52 棒短くさようなら空へ胡瓜の蔓
- 53 われを噛む痩せ蟻のありがとう
- 54 迎え茄子を下手と亡き子に褒めらるる
- 55 トマト挽ぐ赤信号の色だけど 陣野千恵子
- 56 散りてこそ想いの丈を萩の花
- 57 穂芒やみんな素直なフリをする
- 58 稲刈りを終えたる母の柔かき
- 59 立秋がきても素直になれません 福田 英子
- 60 喪の家のむすびの乾き菊脛
- 61 子午線に祭弔ひ露の世に
- 62 つくづくと子規の享年衣被
- 63 山頭火の笠は隣に野紺菊 吾 亦 紅
- 64 邪魔ものの泡立草が風を呼ぶ
- 65 深秋や冷めたコーヒー夜のしじま
- 66 望郷の思いに募る草紅葉
- 67 足洗ふ疎水に夏のまだ名残り 岸本千鶴子
- 68 還れないプラスチックの桜かな
- 69 夏帽のかくす敗者の涙かな
- 70 まろびつつ歩く七十路石路の花
- 71 バラックの無人販売秋深む 立花眞由美
- 72 収穫の大根など煮て足る暮らし
- 73 語るかに葬送の辞や身にぞ入む
- 74 憂きことのない顔をしてレモンテイ
- 75 吾もしくじり数えてみたり桜桃忌 有村 王志
- 76 限界村落殺意の走る薄氷田
- 77 祭果てみんな出てゆく無人駅
- 78 一歩ずつ晩年の貌落葉踏む
- 79 てのひらは無言無想の寒露かな 桐野 力
- 80 蚯蚓鳴くたまにはお皿洗ってよ
- 81 釣瓶落とし名山ひとつ影絵めき
- 82 平凡な夜平凡な朝バッタ飛ぶ
- 83 だあれにも言えぬ夢蛇穴に入る 岡村 君香
- 84 口々に褒める柿あり納棺日
- 85 ベランダに布団の花咲く秋日和
- 86 短日や終業ベルに嫉妬する
- 87 振り向けばそこには落ち葉ケセラセラ 佐藤 次江
- 88 羽衣のごとき雲あり秋高し
- 89 冬瓜のポトフとろける心まで
- 90 ふんわりとコキア秋色庭の隅
- 91 冬日和パッチワークの針すすむ 赤嶺 広史
- 92 夕月に澱んだ心見抜かれる
- 93 秋深し二串の団子分けて置く
- 94 落葉掃くほどよき距離の隣保班
- 95 けんけんぱしてもみじ葉の端をゆく 本田 圭子
- 96 空蟬や未来へ向う置き手紙
- 97 秋茄子や刃物研ぎ屋のおじいさん
- 98 抜け殻になつて落葉の中にいる
- 99 墨の香のゆるりと立ちて文化の日 早澤まり子
- 100 明日あると信じて老いの温め酒
- 101 来し方は誰にも言わず桐一葉
- 102 孫なしの人生もあり小豆煮る
- 103 さつそうと八十路を生きて寒牡丹 井上 則子
- 104 南向きの窓を横切る十三夜
- 105 踏み出そう季は秋最中友の声
- 106 蔦紅葉櫂の幹に彩添えて
- 107 かさと落ちこそと踏まれて柿落葉 足立 町子
- 108 母泣かすはずじやなかった枇杷の花
- 109 父とゆく十一月の遠い海
- 110 今だから言える身の上部部の実
- 111 短日のお好み焼に足す涙
- 112 せめぎ合う棋士の手のうち野火走る 田中 充
- 113 螢火の思いの丈を綴りたる
- 114 母系絶え父系も遠し秋の暮
- 115 隙間風浮世の塵がうづくまる

- 140 ライダーが押し寄せる阿蘇の芒原 生野 義晴
- 139 霧の中すぐそのとう遠さかな  
138 明日あるを信じ花の種を採る  
137 朝まだき月の蝕にしばし佇む  
136 秋深し能面般若の怪しき舞 生野 義晴
- 135 良夜なる飲めぬ夫おとこに妻ロック 川西 達子
- 134 ドドンコドンと神楽軍団大暴れ  
133 溪流の山女魚づくしに人ルン  
132 馬貞墓地守る軍勢水引草 原田 勝子
- 131 晩年の行く末重ね烏瓜 原田 勝子
- 130 秋麗やキャンセル待ちのバス旅行 田代 直之  
129 彼岸花崩れしままの文化財  
128 天国の柩の中の花野かな
- 127 寒卵今朝生みたてと一個づつ  
126 食べ頃よ熟柿がサイン送ってる  
125 変化球キャッチ夫への返り花 田代 直之
- 124 壮年も晩年も過ぎ返り花 河野 洋子  
123 秋麗や健気な赤子抱きおり  
122 朝の日をひとりじめする木守柿  
121 ひとり居を目ざめ秋冷深みを作り  
120 テールランプを見送る指の夜寒 河野 洋子
- 119 新米の香りただよふ朝のドア 天田 泉美  
118 秋さぶや心の棘を解き放ち  
117 ひとり居を目ざめ秋冷深みを作り  
116 黄蝶が進む山なり秋の日に 天田 泉美
- 115 秋風に吹かれて散歩我一人 清家 元幸  
114 ザワザワと木の葉擦れ合う秋の森  
113 寒き朝季節が変わる秋の日に  
112 寒き朝季節が変わる秋の日に  
111 黄蝶が進む山なり秋の日に 清家 元幸
- 166 秋声に身じろぎもせぬ忠魂碑  
165 出没の熊におののく秋の街  
164 団栗を踏む子拾う子おどける子 有永真理子
- 163 風になり少年渡る秋彼岸  
162 雲ゆたり残暑は去ると告げてゆく  
161 過ぎてゆく時間の中を茄子の花  
160 村は今案山子主役となりにつけり 永松左世美
- 159 秋麗や健気な赤子抱きおり  
158 朝の日をひとりじめする木守柿  
157 秋気満つ図書館はいる二人づれ  
156 こだわりの湯呑み一服秋を飲む 永松左世美
- 155 苛立ちは消えてしまえよ虚栗  
154 残り蚊を払い仏陀に合掌す  
153 旅慣れた人に寄り添い地虫鳴く  
152 蛇口より漏れる水音秋深し 佐藤 哲夫
- 151 木守り柿願い込めるも鴉来る  
150 選挙戦案山子と握手出発す  
149 中腰の横一列や生姜掘り  
148 市役所の憩いの俳句暮の秋 高橋 玲子
- 147 青柿のしずかに太る夜の呼吸  
146 老木の表皮めくれて秋思かな  
145 大夕焼明日に予定のない安堵  
144 一つの世も恋は異なるもの紅葉忌 内田トシ子
- 143 ちよっぴり泣きちよっぴり笑う秋の空  
142 独り居の和みの日々や萩溢る  
141 姦人本音飛び出す曼珠沙華
- 191 焔立つ山の形に紅葉かな 安部ユリ子  
190 なにげなく見上げる空は冬の色  
189 刈干しの唄につられて県境  
188 お気に入りシーズンOFFの土用干し  
187 芋の葉の露に飲まれて虫まるく 河野 則子
- 186 抽斗を半分開けて秋落暉  
185 晴れや卦と唱えつ土用の背広干す  
184 墨の香の筆にのこれる秋思かな  
183 サラリーマン終えいし背広の土用干し 安森 範明
- 182 山茶花を見てみえてなし出勤す  
181 新米を受けて恩師の笑顔かな  
180 笛の音や雅楽の調べ冬椿  
179 土手歩く足元かすめ夏つばめ 藤 万葉
- 182 生身魂涼しく舐めて紙を切る  
181 にわか雨案山子の傘を借りて待つ  
180 ロシアへとディランよ響け風は秋  
179 良夜よシヨパン聴くごと「七力」の句 小野みち子
- 181 まどわされて金木屋の中に居る  
180 自分から銀木屋の中に入る  
179 おしろい花とうに忘れた化粧かな  
178 甲斐加代子  
177 芒原なつかしき人通り行き
- 191 秋の季語あふれつまづく赤い靴  
190 うたせ湯にもみじかつ散る句会かな  
189 歳月の重み分け合う大銀杏  
188 紅葉に吞まれ平和の水を飲む

- 216 肩書は無用枯野に夢を追う  
御手洗豊海
- 215214213212 秋夜明金星に肺掴まれる  
鬱屈はひらがなにして秋の風  
十三夜独りに慣れぬ友と居る  
賞められて疎まれて蜘蛛の囀ゆらり
- 211210209208 笑点の渦の中だけ点る日々  
夏物と冬物着替娘継ぐ  
トラクターの稲の歩幅に風過ぎる  
乞食たち風が羨む夜の飯  
林 香澄
- 207206205204 村瘦せて落葉が騒ぐ通学路  
立冬の村は能面老いてゆく  
短日の風をたたんで廃校舎  
山茶花のこぼる校庭献血車  
加藤 征孝
- 203202201200 山笑い山燃え命連鎖する  
山笑い山燃えやがて就く眠り  
一張羅で命をつなぐ草紅葉  
生きている生きているよと虫の闇  
上田たかし
- 199198197196 凌霄花スカートほどの揺らぎかな  
新涼や海に引き継ぐ滑走路  
秋深しページをめくる音清し  
クレヨンを並べて富良野秋の蝶  
坂本 一光
- 195194193192 稲埃吸って農婦の腰豊か  
長き夜や眼の裏の五七五  
口髭にカフェオレの泡冬うらら  
綿菓子のような告白冬に入る  
高倉 直人
- 242241240239 晩秋の午後教会の硬い椅子  
船虫が奈落の国へさらわれる  
落ちておちて私がどんぐりになる  
丘陵は海につながる寒夕焼
- 238237236235 陶郷の棚田を秋が降りて来る  
蔓引けばむかごほろほろ野津の郷  
おみなえし私を知らぬ母がいる  
かるめ焼つんと崩れる秋うらら  
赤峯 友子
- 234233232 鶏頭や戦の神の裏おもて  
網投ちの腕より鮎の早さかな  
きざはしを登れずヒンズー神の秋  
石橋紀公子
- 231230229228 はにかんだ順に鬼灯朱くなる  
鯛焼く戦火に引火せぬように  
今生れし子を触るかに掌の熟柿  
突風にかからかわれつつ落葉掃く  
菅 勲
- 227226225224 まびき菜を泳がせすくう手のざるで  
冬野菜発芽の隊列勇ましく  
義母の折る紙の蝶飛ぶ白き壁  
「歩こう会」午後のリュックに秋麗  
吉田 素子
- 223222221220 日だまりを出でて帰らぬ冬の蝶  
山茶花や一人ごころの空と風  
首かしげ枯蟻螂のわれを見る  
横顔のしあはせそうな日向ぼこ  
竹下美津子
- 219218217 孤独でも我は我道枯野ゆく  
春の夢未完のままに老ゆ  
生きているお山の大将冬銀河  
時松由美子
- 267 山の端に帰りそこねし白い満月つき  
赤峰佐代子
- 266265264263 飢えもなく争もなく昼寝かな  
田を守り村を護りて風薫る  
老人ホーム週一回のパン屋さん  
満月や夜の目遠目笠の内  
赤峰佐代子
- 262261260259 稲穂垂れ出番だ出番コンバイン  
天高し直線の雲東京行き  
曼珠沙華紅風吹いて七ツ森  
水分けて水分峠の霧が泣く  
福井トミ子
- 258257256255 玉の汗幾つも越えて上り坂  
月参り坂を登れば風青し  
みどり児を抱く眼差し合歓の花  
我が生家終焉なりし秋の暮れ  
時松ヤスコ
- 254253252251 寒雷や住処追われる小鳥たち  
白蛇に金運頂く紅葉山  
霰降り弾あられ降り人の世は  
婆ひとりポンコツ駆って花野まで  
志賀 文子
- 250249248247 まっすぐに生きて古希なる久女の忌  
空也忌や俵の軽きコシヒカリ  
侘助の高きを眺め背を伸ばす  
冬の蚊や海よりの風温し  
加納 知子
- 246245244243 秋高し地這い登りし無明橋  
脳腫瘍農に生きたや花芒  
倒れてなほ駆け出すかな寒の水  
タデ原や芒の穂波孫走る  
幸谷 恵子
- 鎌倉真由美

270269268 血圧は今日も正常蕪間引く  
銀杏を散らして母校は日曜日  
健脚に径譲りつつ紅葉山

佐藤 律子

274273272271 帰省子の今朝まで居りし六畳間  
冬めくや家系図たどる吾の記憶  
喜びも悔いも日なたの氷かな  
朝霧や季のもの多しお品がき

松廣 李子

278277276275 洗面台の二匹の蟻プロローグ  
番号で呼ばるる秋の診療所  
鳩は舞い秋空へ駆ピアノ  
箱型の家の凹みや翳雲

大村 和代

282281280279 ひとすくい太古の味や寒の水  
枯れ草の命を散らし種守り  
風吹けどゆれや無心の枯れ尾花  
バラ一輪ささぐ心は百万本

大森 浩司

286285284283 見渡せば村は稲刈る日和かな  
秋日和リハビリテーション百歩行く  
山寺に着けば静かな紅葉かな  
みかん剥く香りの扉開くごと

白土 正江

290289288287 はじめて語るじいじの戦争文化の日  
戦争がぬつと顔出す紅葉山  
視界ゼロ鉄橋の霧日本の霧  
思い出はみな結晶に枯蟻螂

(以上)

◆自薦作品には73人の会員から290作品が寄せられました。この中から10句を選び、3月31日(日・消印有効)で事務局にお届けください。左囲みの「第1回雑詠句会」作品の投句締切日と同じです。自薦作品は作者名が分かれますから選句が難しいかもしれません。しかし作者が分かった中での選句も、俳句人生の中ではたくさんあります。「付度せずが良いと思うものを選ぶ」ことも訓練が必要です。

◆同封の選句用紙を使うと、どのコンビニのファックスでも50円で送れます。自宅のファックスでもOKですが、筋が入って読めなかったり、ローラーの吸い込みが悪く二枚に及ぶことが多発しています。メンテナンスをお願いします。

◆自薦作品は4句募集ですが、間違えて3句投句した方が複数いました。ご自分の名前を書き忘れる方もいます。誤字脱字や読みにくい文字

## 第1回雑詠句会 作品募集

- ※次年度第一回雑詠句会作品を募集します。  
一人三句。協会未発表のもの。なるべく当季。
- ※年間一句賞の対象になります。
- ※締切は三月三十一日(日)消印有効。
- ※同封のFAX用紙で近くのコンビニからお送りください(料金50円)。その他、郵送やメールなど、形式にはこだわりません。送り先は事務局宛て。
- ※年間一句賞は総会で表彰するとともに 会報でも紹介します。

もたくさんあります。そんな時事務局では無効にせずにか読み解こうとするため、五倍も十倍も時間がかかることとなります。「中学生でも判読できる原稿」にご協力ください。

◆「第34回定期総会」は2月12日(祝)に決まりました。総会のあと、前回同様に懇親句会を開催します。総会に出席の方は2月5日(月)までに懇親句会作品2句をお送りください。会員以外の方も参加できます(発言も可、議決権はありません)。総会については、「会報130号」でお知らせしています。

# 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)